

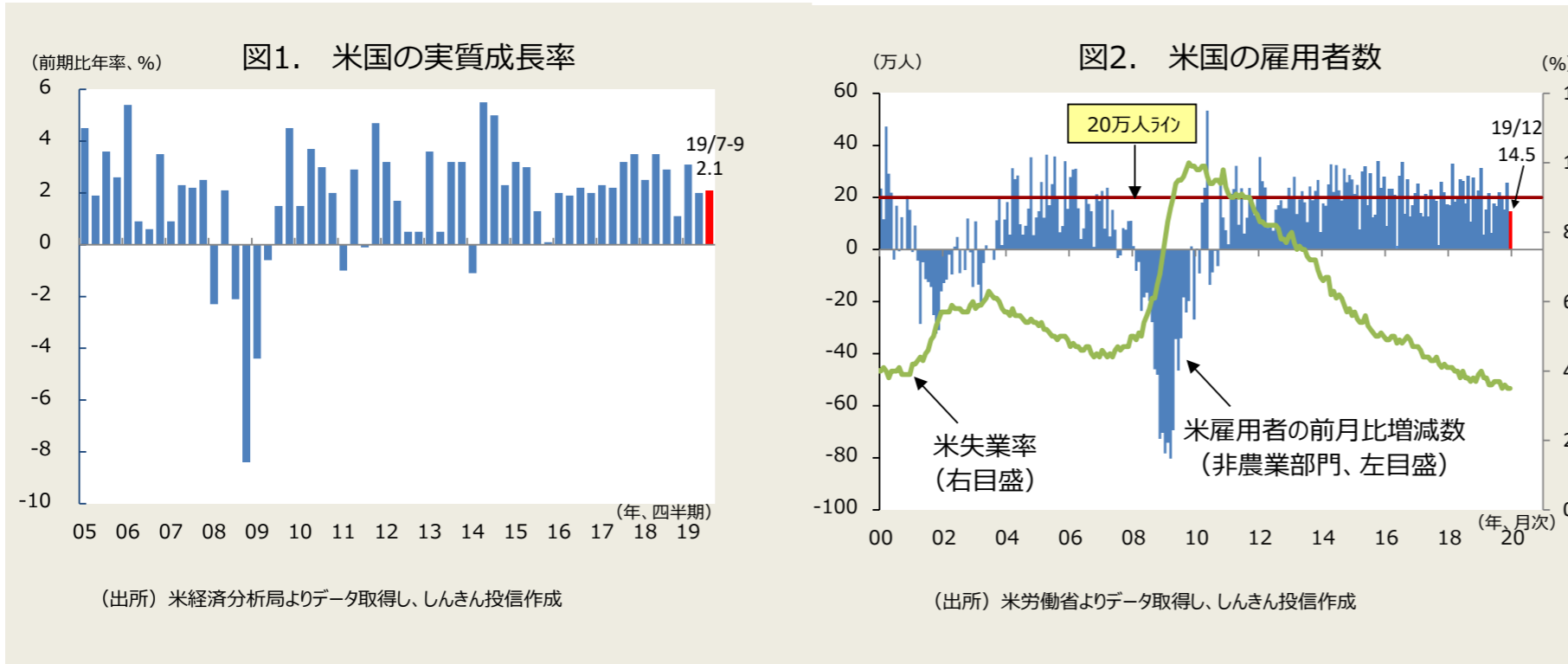
海外経済の現状と見通し : 2020年1月

米国

米国の実質国内総生産（GDP、図1）は昨年7-9月期に前期比年率2.1%となった後、10-12月期も同2%前後の成長が見込まれます。通年では一昨年に3%近い成長率となった後、昨年と今年は2%台前半が予想されます。

雇用者数（図2）は伸びが鈍化しているものの、失業率は歴史的な低水準にあります。これを背景に、消費主導の景気拡大が今年も継続しそうです。もっとも製造業の景況感は依然低調で、設備投資は伸び悩みそうです。

米連邦準備制度理事会（FRB）は当面、現行の政策を維持する見込みです。ただ、トランプ大統領からの利下げ圧力が増すとみられる中、FRBが11月の大統領選までに追加利下げを行う可能性もあります。



米国の景気・物価・金融政策の見通し

	(実績)			(予測)					
	2018年 (実績)	2019年 (予測)	2020年 (予測)	2019年 7-9月期	10-12月期	2020年 1-3月期	4-6月期	7-9月期	10-12月期
実質成長率	2.9	2.3	2.0	2.1	1.8	2.1	1.9	2.2	1.7
消費者物価	2.1	2.3	2.1	2.3	2.3	2.1	2.1	2.2	2.1
政策金利	2.50	1.75	1.75	2.00	1.75	1.75	1.75	1.75	1.75

(注) シャド一部分は実績値、予測はしんきん投信。実質成長率(四半期)は前期比年率。消費者物価はコア。政策金利は上限金利、期末値
 (出所) 米商務省、米労働省、米FRBよりデータ取得し、しんきん投信作成

金融市場見通し

【予想レンジ期間】(2020年1月~2020年12月)

米株式相場

【予想レンジ】 NYダウ: 26,500~30,000ドル

◆米中貿易摩擦の緩和などを背景に、上昇基調が続く見通しです。



米長期金利

【予想レンジ】米10年債利回り 1.5~2.2%

◆インフレ過熱の兆しはないため、金利上昇は限定的とみられます。



為替

【予想レンジ】ドル円レート 105.0~112.0円

◆中東情勢が再び緊迫化した場合は、円高が一加速しそうです。

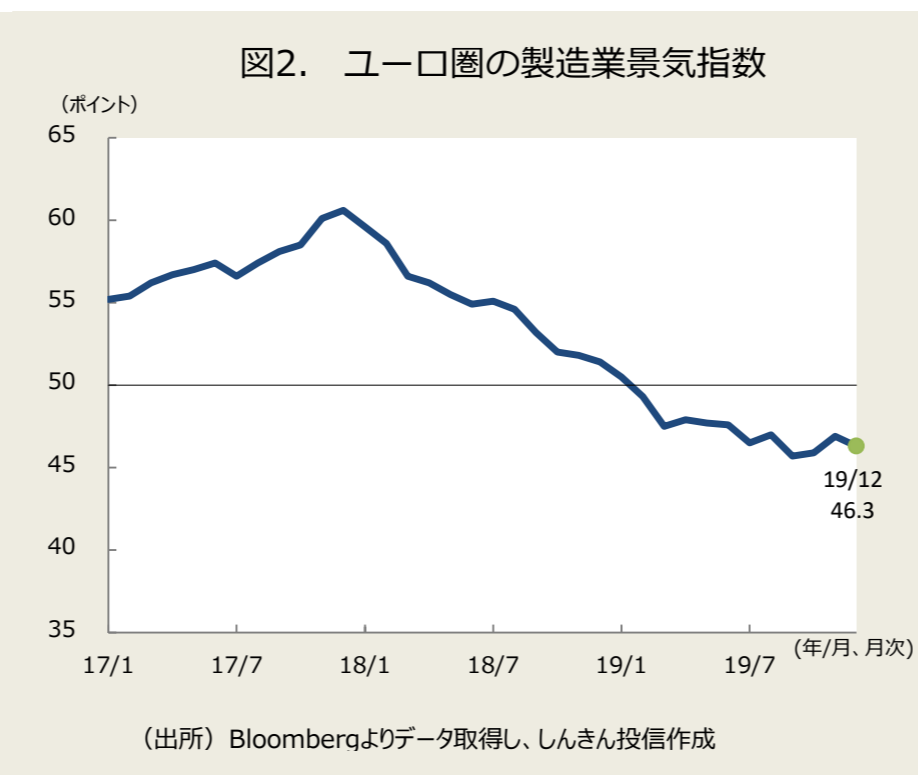
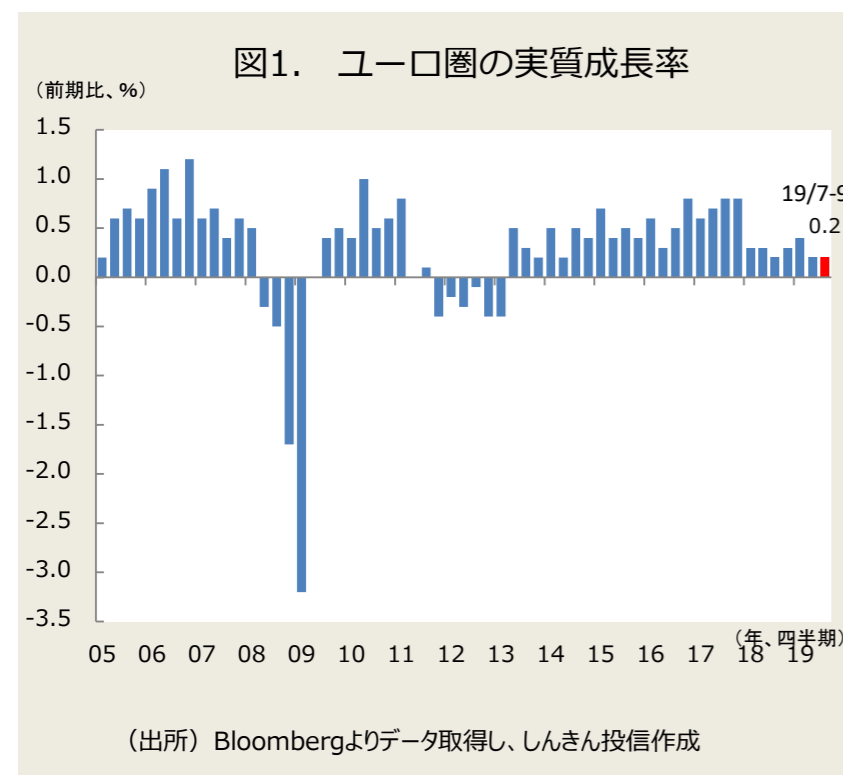


海外経済の現状と見通し : 2020年1月

ユーロ圏

ユーロ圏の実質GDP(図1)は昨年7-9月期に前期比0.2%増(前年比1.2%増)となった後、10-12月期も同程度の小幅なプラス成長が予想されます。鉱工業生産は依然弱く、製造業の景況感(図2)も低調です。サービス業は底堅いため景気後退に陥る可能性は低いものの、今年も1%台前半の低成長が予想されます。金融政策については、欧州中央銀行(ECB)は当面、様子見姿勢を維持する見通しです。

なお、英国では1月末の欧州連合(EU)離脱が確定的となりました。とはいえ、その後の移行期間中にEUとの新貿易協定が円滑に締結されるか、といった問題が残っているため、引き続き要注意です。



ユーロ圏の景気・物価・金融政策の見通し

	(実績)			(予測)						
	2018年 (実績)	2019年 (予測)	2020年 (予測)	2019年 7-9月期	10-12月期	2020年 1-3月期	4-6月期	7-9月期	10-12月期	
実質成長率	1.9	1.3	1.5	1.2	1.3	1.4	1.6	1.6	1.5	
消費者物価	1.8	1.2	1.3	1.0	1.0	1.2	1.2	1.3	1.3	
政策金利	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	

(注) シャドー部分は実績値、予測はしんきん投信。消費者物価は総合。政策金利(主要リファイナンス・オペ金利)は期末値
 (出所) 欧州委員会、ECBよりデータ取得し、しんきん投信作成

金融市場見通し

【予想レンジ期間】(2020年1月~2020年12月)

独株式相場

【予想レンジ】DAX: 11,000~14,000ポイント

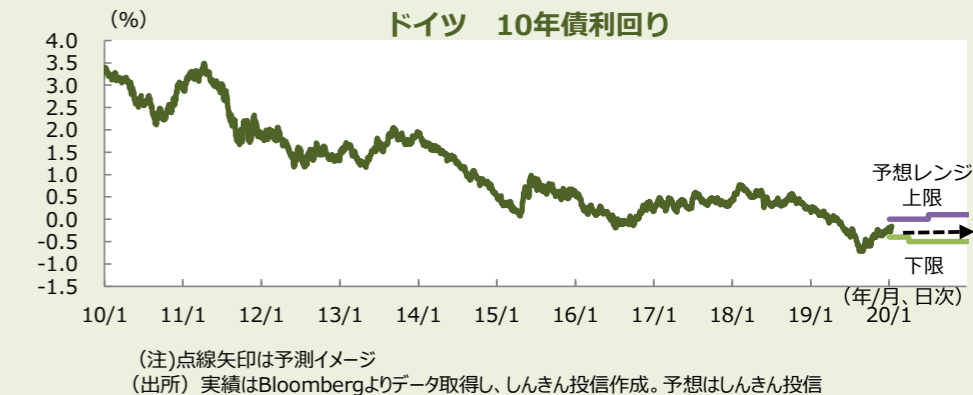
◆米中貿易摩擦の緩和や中国景気の底打ち観測が、株価を支えそうです。



独長期金利

【予想レンジ】独10年債利回り -0.5~0.1%

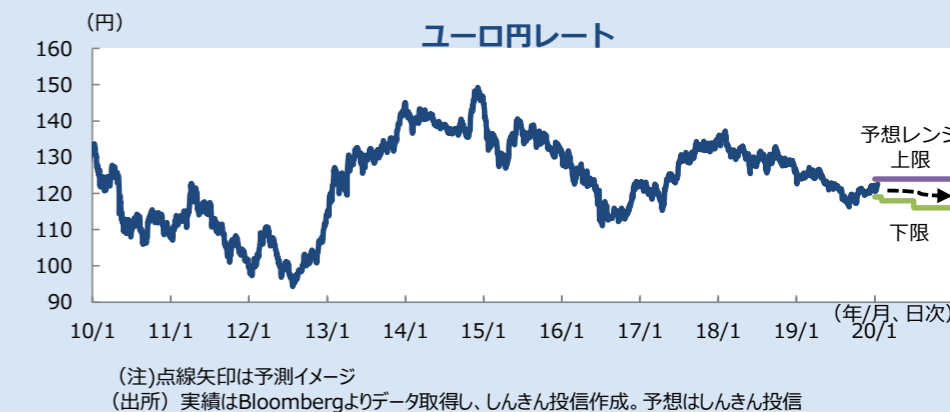
◆追加的な金融緩和余地は小さく、さらなる金利低下は限られそうです。



為替

【予想レンジ】ユーロ円レート 116.0~124.0円

◆ユーロは対円で過大評価されているとみられ、下落基調が見込まれます。



(2020.1.14 チーフエコノミスト 辻 佳人)



＜本資料に関してご留意していただきたい事項＞

※本資料は、ご投資家の皆様に投資判断の参考となる情報の提供を目的として、しんきんアセットマネジメント投信株式会社が作成した資料であり、金融商品取引法に基づく開示資料ではありません。

※本資料は、信頼できると考えられる情報源から作成しておりますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。また、いかなるデータも過去のものであり、将来の投資成果を保証・示唆するものではありません。

※本資料の内容は、当社の見解を示しているに過ぎず、将来の投資成果を保証・示唆するものではありません。記載内容は作成時点のものであり、予告なく変更する場合があります。

※投資信託は、預金や保険契約とは異なり、預金保険機構・保険契約者保護機構の補償の対象ではありません。また、金融機関でご購入いただいた投資信託は、投資者保護基金の対象ではありません。

※投資信託は、値動きのある有価証券等(外貨建資産には為替リスクもあります)に投資しますので、基準価額は変動します。したがって、預金と異なり投資元本が保証されているものではありません。運用による損益はすべて投資者の皆様に帰属します。

※特定ファンドの取得のお申込みに当たっては、販売会社より当該ファンドの投資信託説明書(交付目論見書)をあらかじめ又は同時にお渡しいたしますので、必ず内容をご確認の上、ご自身でご判断ください。また、請求目論見書については、販売会社にご請求いただければ、当該販売会社を通じて交付いたします。

※「日経平均株価」(日経平均)に関する著作権、知的所有権その他一切の権利は日本経済新聞社に帰属します。日本経済新聞社は日経平均株価を継続的に公表する義務を負うものではなく、その誤謬、遅延又は中断に関して責任を負いません。

※東証株価指数(TOPIX)は、東京証券取引所の知的財産であり、この指数の算出、数値の公表、利用など株価指数に関するすべての権利は東京証券取引所が有しています。東京証券取引所は、TOPIXの算出若しくは公表の方法の変更、TOPIXの算出若しくは公表の停止又はTOPIXの商標の変更若しくは使用の停止を行う権利を有しています。

※東証REIT指数は、東京証券取引所の知的財産であり、この指数の算出、数値の公表、利用など、東証REIT指数に関するすべての権利は、東京証券取引所が有しています。

【お申込みに際しての留意事項】

■投資信託に係るリスクについて

投資信託は、株式や債券等の値動きのある有価証券等(外貨建資産には為替リスクもあります)に投資しますので、基準価額は変動します。したがって、預金と異なり投資元本が保証されているものではありません。運用による損益はすべて投資者の皆様に帰属します。

また、投資信託は、個別の投資信託ごとに投資対象資産の種類や投資制限、取引市場、投資対象国等が異なることから、リスクの内容や性質が異なりますので、ご投資に当たっては投資信託説明書(交付目論見書)や契約締結前交付書面をよくご覧ください。

■投資信託に係る費用について

(お客様に直接ご負担いただく費用)

◆ご購入時の費用…購入時手数料 上限3.3%(税抜3.0%)

◆ご換金時の費用…信託財産留保額 上限0.3%

(保有期間中に間接的にご負担いただく費用)

◆運用管理費用(信託報酬)…純資産総額に対して、上限年率1.628%(税抜年率1.48%)

◆その他の費用…監査費用、信託財産に関する租税、信託事務の処理に要する諸費用、有価証券売買時の売買手数料等および外貨建資産の保管等に要する費用は、ファンドより実費として間接的にご負担いただきます。また、投資信託証券を組み入れる場合には、お客様が間接的に支払う費用として、当該ファンドの資産から支払われる運用管理費用、投資資産の取引費用等が発生します。これらの費用につきましては、運用状況等により変動するものであり、事前に料率、上限額等を示すことができません。投資信託に係る上記費用(手数料等)の合計額については、ご投資家の皆様がファンドを保有される期間等に応じて異なりますので、表示することができません。

《ご注意》

上記に記載しているリスクや費用につきましては、一般的な投資信託を想定しております。費用の料率につきましては、しんきんアセットマネジメント投信が運用する全ての投資信託のうち、ご負担いただくそれぞれの費用における最高の料率を記載しております。投資信託に係るリスクや費用は、それぞれの投資信託により異なりますので、ご投資される際には、事前に投資信託説明書(交付目論見書)や契約締結前交付書面をよくお読みください。